

DRAMA かながわ 73

神奈川県演劇連盟事務局：神奈川県横須賀市米が浜通1-3 Tel.045-263-4472



湘南の海からさわやかな風が届いた 青少年のための芝居塾 群青スペクトルの教室

作:桜木想香 演出:熊手竜久馬 音楽:鈴木清人 振付:岸下香

8月14日(金)～16日(日) 神奈川県立青少年センター ホール

芝居塾を終えて

虹の素 熊手竜久馬

8月14日～16日。桜木町はみなとみらいを訪れる人でにぎわう。私たちはその反対側へと降り、真夏の太陽が照りつける中、汗をかきながら紅葉坂を登る。今年も、県立青少年センターにて「青少年のための芝居塾2015」が無事幕をおろしました。

芝居塾制作委員会、神奈川県演劇連盟の皆様、劇場スタッフ、その他本当に多くの方々のおかげをいただき、この公演を終えることができました。心より感謝するとともに、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

さて、ホールで4年目を迎える今回の芝居塾を、私たち虹の素が担当させていただけたことは、歓びでもあり大きな不安でもありました。ご存知の通り、私たち虹の素はまだ若い劇団です。メンバー全員が平成生

まれで、塾生とほとんど年齢に差がないこと。青少年センターホールのような大規模な会場も、50名近い出演者も、ミュージカルも、この規模の公演に必要な予算組みも、なにもかもはじめてでした。けれど、始めはいつも「はじめて」なのだし、できるようになってからなんて言っていたらいつまでたってもできることはない。せっかく巡ってきたチャンスだから、手を伸ばしてみよう、と、今回挑戦させていただきました。中学生のころから、区民ミュージカルに15本近く出演し、このような一般参加型の公演の指揮を執るのは、自身の夢のひとつでもありました。

さて、今回の「群青スペクトルの教室」は湘南の新設校を舞台にした作品でありました。「青少年のための」という冠が付く中、青少年に一番身近である「学校」が舞台となる作品は実は今までほとんどなく、今回がはじめてでした。

青少年のための芝居塾2015 群青スペクトルの教室

21世紀に入り少子化が進む中、神奈川県内で頻りにされてきた、高校の統廃合。そしてできた新設校の初年度は、元浜北高校の生徒と、元横南高校の生徒と、何も知らない新一年生と、3種の異なる集団で構成され大変魅力的な設定でした。その中で、「どんな学校にしたい？」と提示されたテーマには、塾生が演じるだけでなく自身の日常生活においても問いかけるべき問題で、それは塾生のみならず、観客の一人一人の心にも刺さる言葉であったのではないかと考えています。また、湘南発祥の地域通貨、「ビーチマネー」を扱い、神奈川発祥の作品であるということも意識しました。実際に塾生は、フィールドワークを行い海岸のゴミ拾いをしたり、実際にビーチマネーを取り扱っている店舗にインタビューしにいたりして、環境についての理解を深めることができました。

昨年、一昨年と採用してきたダブルキャスト制を今年は廃止し、全員シングルキャストにしました。理由は、塾生が少なかったということもありますが、一番は、稽古時間の確保です。ダブルキャストですと、台本は同じでも違う作品をつくる訳ですから、稽古は2倍時間がかかります。2倍というよりも、元々の稽古日数はあらかじめ決まっている訳ですから、半分になると言った方が正しいでしょうか。それぞれにかける時間を少なくする中でダブルでやるよりも、稽古時間丸々使ってひと作品つくる方が大事だ、と私は思ったからです。

結果、過去の芝居塾の作品に一步も引けを取らない、むしろより魅力的な作品がつくれたのではないかと胸を張って私は言います。自分の役は自分しかいない、と己の与えられた役に責任を持って必死になって取り組んだ塾生達みんなの努力の賜物であると感じています。

その結果、過去の芝居塾と著しく劣ってしまったのは、集客です。例年の1300~1500名を大きく下回る1005名という結果に終わりました。たった今「シングルキャストにした」その結果、と書きましたが、塾生一人あたりの集客人数自体は、例年と変わってはい

ません。単純な出演者の減少に起因するもので、例年同様の人数が集まっていれば、例年通りの集客が見込めたと思っています。が、塾生の減少がわかっている段階で大きく手を打たなかった自分たちの責任であるとも捉え反省している次第でもあります。

お盆という時期、とは言いますが文化の薄れてきた日本社会（特に芝居塾を見に来るような若者）にとってお盆がどれほど影響力のあるものかもわかりませんし、仮に大好きなミュージシャンのコンサートなどあればたとえお盆でもいくのでしょうから、時期といういい訳もあり得ないと考えています。

それでも、塾生達はチラシやポスターを貼らせてもらえるよう会場近隣のお店を回ったりしてくれました。Jリーグのクラブチームも、創設当初は、スタッフが地元の店舗をとにかく一軒一軒回ったそうです。千里の道も一步から。一人でも多くの方の目にとまり、芝居塾という企画が認知され、来年以降に少しでも繋がれば…という祈りのような思いです。

虹の素の公演を、芝居塾を、もっとお客さんを魅了し惹き付けるコンテンツに発展していけたらいいという願いの下、ひいては演劇全体がより多くの人に親しまれるようになるために、若い世代が必死で演劇にとりくめるこの「青少年のための芝居塾」は間違いなく一役かっていると思いますし、何よりも私自身がその確固たる証明であると自負しています。

私自身、第1回の青少年のための芝居塾に塾生として参加し、そのままずっと演劇の道に進み、9年目にして指揮を執る側に就くことができました。今後も塾生の中から私のように指導者になる人材が育っていけば、本当に素晴らしいなと思います。

私の初舞台である緑区民ミュージカルの演出であり、今回総監督をしていただいたよこはま壺座の濱田さんにはいつものことですがたくさん指導をいただきました。私自身まだまだ成長しなければいけないところたくさんあり、それをひしと感じさせてもらい、私にとっても「芝居塾」でありました。

「芝居塾 葛藤と友情」

文：劇団河童座 中西八洋

今年の芝居塾、担当劇団は虹の素。演目は「群青スペクトルの教室」。

「君たちは今学校をどんな学校にしたい？」このセリフが強く印象に残る脚本である。誰かがやってくれるだろう…流されればいいや…という考え方を持つ学生が多い中、自主性、自立心を強く促す、メッセージ性の強いテーマであった。芝居塾に携わった学生は然り、観劇した若者にも、このメッセージは強く残っただろう。

また、湘南の海を舞台に、ビーチグラスを通して環境問題を考えるシーンが主体となっている。ここで取り上げられた、ビーチマネー制度とは、湘南エリアを中心に、赤いビーチグラスを200円、水色は50円などといった具合にビーチグラスを実際に通貨として使用することができる制度である。物語では生徒自らが立ち上げた、という設定となっているが、実際は湘南エリアのサーファーたちが海から人工物をなくしたい、という思いから始められたそうだ。実際に、ビーチマネー制度を受け入れている店の約7割のオーナーは、サーファーである。つまり、ゴミ拾いをしたお駄賃として、ビーチマネーの制度が成り立っている。ゴミ拾いをせずに、ビーチグラスだけを集めてしまう



…というのは本末転倒ということだ。物語では、ゴミをポイ捨てしている生徒や、ビーチグラスだけを回収する生徒に対して、怒りの感情をぶつけるというシーンがあった。この、ビーチマネー制度というテーマだけで、怒り、葛藤、友情、環境問題といった青春物語を展開する脚本には天晴。舞台は回り舞台を生かし、どの角度から見ても、舞台装置として活用できる、象徴的なオブジェが中央に1つ。また教室のシーンになると窓と思える装置が下りてくる。海岸と教室を表すには最適な舞台装置だった。照明、音響、舞台装置がきれいに画として映る舞台だが、すべてのシーンに執拗にこだわりすぎてしまい、何を伝えたいのかわからなくなってしまうところがあった。それはセリフも同様である。青春、環境問題、ファンタジー、いろいろな要素が盛り込まれていたがどのテーマが一番伝えたいのか。切り捨てられればよりわかりやすく、面白い芝居になった。

芝居塾の参加者のほとんどが中学生、高校生、大学生だ。若者が集まる場所には若者は集まりやすい。そういった意味では、今回の「群青スペクトルの教室」は若者に大きなものを与えることができたのではないだろうか。



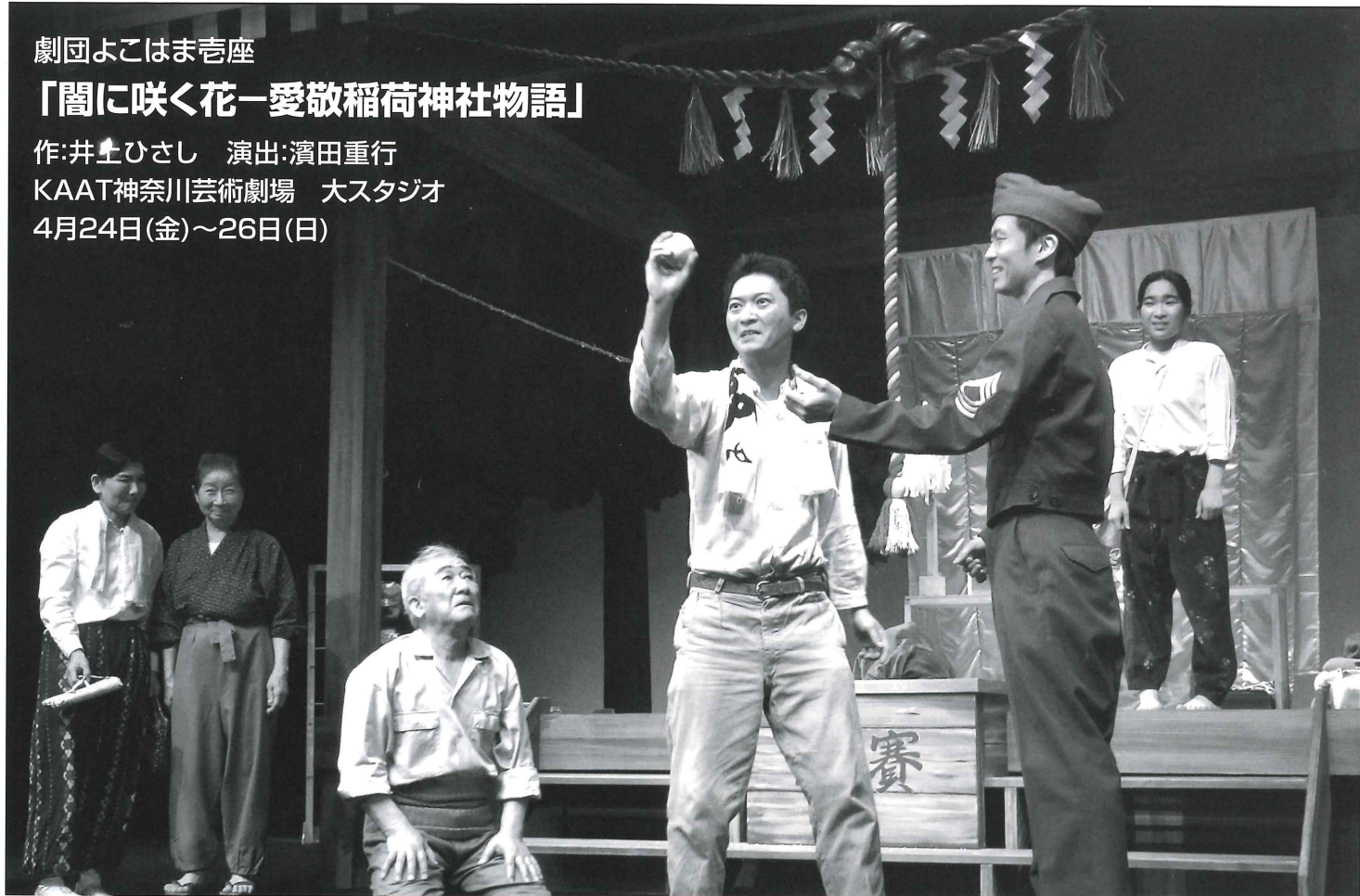
劇団よこはま壱座

「闇に咲く花—愛敬稲荷神社物語」

作:井上ひさし 演出:濱田重行

KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ

4月24日(金)~26日(日)



闇に咲く花 — 愛敬稲荷神社物語 — 劇評

劇団河童座 高島明子

まず会場に入ると目に飛び込んできたのは立派な神社でした。吊下げられた大きな屋根、鳥居の向こうには神社に登ってくる階段道がありました。舞台の上にはすっかり物語の世界が出来上がっていました。

大きな屋根といい、登ってくる道といい、KAATの大スタジオだとこんな舞台セットが創れるんだと、改めて感心しました。その舞台セットを見たら、これは舞台全体が見える位置で観た方が良いかなと思い、真ん中より後ろの席に座りました。大正解でした。役者さんの顔はちょっと遠くなりますが、鳥居の向こうから登ってくる役者さんの顔もよく見えました。

前の方に座っていたら、登ってくる役者さんの顔は舞台に埋もれて見えなかったと思います。まあ、それもまた面白いのかもしれませんが。

役者さんたちは台詞もよく聞き取れて、しっかり芝居をしているのがよくわかりました。ですがそれぞれがしっかりし過ぎていて、観ていてちょっと疲れました。個々の個性は出ていたと思いますが、もっと極端に出してもよかったかなと思います。ですが、個対グ

ループになった時、例えばおまわりさん対女性陣、神主さん対女性陣のような時は、グループになった時の個性が出てくるともっと面白かったと思います。

グループになっても個々の個性の方をはっきり出して、しっかり芝居をし過ぎてしまって、個対グループの面白さが壊れてしまっていたように思います。

台本の真面目なところはしっかりと芝居をしていてよかったのですが、お遊びのところはテンポアップしてチャンチャンと終わったら、もっと笑いが出ていたのではないかと思います。

全体的に井上ひさしの台本の軽妙さ、言葉遊びの面白さが生きてこなかったように感じました。もったいなかったと思います。

そして、最初から最後まで舞台の隅にいたギタリストさん。台本の指定だとしても、本当にギターを弾いているのであれば、ずっとそこにいる意味は分かりませんが、ただ形だけになってしまうのでしたら違う出し方をしてもよかったのではないかと思います。

神奈川県演劇連盟プロデュース公演

「パンクドラッカー」

作:緑慎一郎 演出:笹浦暢大

KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ

4月29日(水)~5月2日(土)



パンクドラッカー 劇評

劇団よこはま壺座 勝崎若子

舞台運営全般を生業としている笹浦演出は、舞台機構をフル活用し暗転の数分のうちにあの大きなステージを人力で前面に押し出す等、構成家として神奈川の中では他の若手演出家の追従を許さない素晴らしい出来だと思う。彼自身「濱田重行の弟子」を標榜している通り、とても似通っていると見受ける。

ストーリーはアラフォー親父が若かりし頃に情熱を傾けて夢を見たバンド「パンクドラッカー」をかつてのメンバーの病をキッカケに再現しようとする、いわば定番の内容である（その後もうひとひねりあるが）ライブハウスの個性がくどいマスターや、昔「乙女」今「太目」のかつての皆のマドンナも登場する。只それだけのストーリーを持ちこたえたのは、プロデュース公演の良い面、上手い役者を揃えられた事にある。

いつも思うのだが、この辺りの笹浦、緑、両氏の交流の広さに依るプロデュースの妙は見事である。只、芝居を観た後は気分が高揚して誰かと酒を飲みながら観た芝居に付いて話したくなるのだが心が動かずそんな気分になれなかったのが残念だ！

緑氏の脚本は着想も良く面白味もあるのだが、最後が期待している観客をいつも裏切っている様な気分がする。しかし続け様にこんなオリジナル脚本が書けるのだからその能力は尊敬に値する。いつかは、我々も彼の脚本で舞台に立ちたいものである。

それから笹浦氏にはいつもオリジナル作品ばかりでなく、是非、チェーホフや井上ひさし作品の様な名作を演出してもらいたいと期待している。その時、もし私が生きていたら是非役者として使ってもらいたいと切望する。とにもかくにも、これからの県演連を背負って行ってくれる両氏に期待大である。エールを送ります。



僕らの演劇

Studio salt

「バルタン」 作：椎名泉水 演出：元田暁子

5月14日～17日 於：神奈川県立青少年センター多目的プラザ

公 演される劇場に入った時から、不思議な雰囲気にも包まれていた。昔のそれこそ昭和期のような机と椅子が並んでいて、他はなにもない。



そして、開演したかと思ったら椅子に座って折り紙をおる男性5人。月を見た話から恋愛の話で盛り上がるが、2人の女の子が現れると人間から動物になる男性達。

名前も取り上げられ、豚や犬と呼ばれる。反抗すると、バルタンという「ゲーム」が始まり女の子からターゲットを指定され鬼に捕まるとゲームオーバーつまりは死である。そうして命が弄ばれ閉鎖的な世界でひとりまたひとりと消えていく。

実際に世界の支配者は2人の女の子だが、もっと見えない大きなものが動いているのが見えるような気がしました。

印象に残ってるのは、2人の女の子が体育祭の話をするシーン。ずっと笑わなかったのに、ほんとに楽しそうに思いついて語り合うところ、男性たちが黙って死を待つなら戦おうと立ち上がり、その時に脱出したら会社を作って熱海の温泉に行こう、そして卓球をしよう。と卓球の打つマネをするところ。

何かに怯えることなく楽しそうに話をする男性達と、支配者ではなくどこにでもいる普通に恋愛する女の子。でもその普通すら許してもらえない。支配者だと思っていた女の子もまた誰かに支配されているのだと。

この作品のテーマはすごく身近な話だと思います。今、争っている国もっとクローズすればいじめや虐待。それぞれ正義や主張があるかもしれないが、考えないのではなく「考えること」が大切なのだと思いました。そしてすべての人の笑顔が何かに奪われることがなければいいと思いました。

劇団「横綱チュチュ」 林菜美

横浜小劇場

朗読劇「葉桜」 作：岸田國士

5月24日 於：山手ゲーテ座

外 国人のための、という形容詞が例外的な存在にしてしまうくらいもあるが、日本初の西洋式劇場が1870年12月、本町通り沿いの居留地68番地に開場し

た「ゲーテ座」であることは歴史の事実である（一般に「本邦初」とされる帝国劇場に先立つこと41年である）。

当時、居留地に住む外国人の間ではアマチュア演劇が盛んで、ゲーテ座



開場は住民の劇場を求める声に応じたものだというのが、こけら落としがアマチュア劇団の公演であるというのも、その後の横浜演劇史を考えると、感慨深いものがある。

ゲーテ座のあった場所はももとは倉庫で、持ち主はノールトフック・ヘフトというオランダ人であった。ヘフトは住民の要請を受け、倉庫を劇場に改装し、劇団に好意的な条件で貸し出しをした。開港期の横浜の文化に貢献した功労者であり、その名は歴史に刻まれている。

そのヘフトを顕彰すべく1971年に横浜演劇研究所と横浜交響楽団が中心となってスタートしたのが『横浜山手ヘフト祭』であり、以後、休むことなく毎年5月、ヘフトの命日に近い日曜に山手ゲーテ座で開催され、今年で44回目を数える。

横浜小劇場の『葉桜』は今年のヘフト祭において、記念公演のひとつとしてリーディング上演された。プログラムによると同劇団が『葉桜』を上演するのは21年ぶりだが、海外との交流が盛んだったことから、フィンランド・上海・ドイツ・フランスでも上演したことがあるそうで、同劇団にとって思い入れの深い作品といえよう。今回出演されたおかざきたえこ、柳下佐和の両名はことあるごとに「『葉桜』がやりたい」と言っておられたが、リーディングとはいえ思いが叶った公演でもあろう。

『葉桜』は娘の結婚をめぐる、母娘の会話が続く一幕物であるから、ある程度の演技がないと単調になる面もあるだろうが、椅子に着席したスタイルながら、時代や役柄を踏まえた衣装をきちんとつけていたのは印象深く、動きが制限されることによってそがれるであろう劇的感興の損失は最小限にとどまっていた。またト書きをナレーション（加藤雄志）によって表現するアイデアも公演を単なる朗読ではなく「朗読劇」とする一助となっていた。

ただし、岸田作品は現代劇のようにもっとアップテンポに演じてもいいのではないかと、というのが僕の感想であり、それゆえか作品の同時代性がいまひとつ伝わらなかったのも残念に感じたところではある。とはいえ、ヘフト＝横浜小劇場＝『葉桜』という連環は、横浜における演劇の歴史そのものであり、ヘフト祭をめぐる各位の長年の尽力に敬意を表するとともに、今後の横浜小劇場の活動に心からのエールを送りたい。

井上 学

ドリームミュージカル2015「長くつ下のピッピ」

作：アストリッド・リンドグレーン 脚本・演出：立花 里美
6月13日、14日 於：KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ

終 始圧倒されたミュージカルだった。下は幼稚園児から上は中学生くらいまでの20名以上の子どもたちが、舞台狭しと歌い踊り演じる迫力に、ただただ魅入られました。



捜し求めた父親、先生等大人とのアンサンブルも見事でした。スクリーンいっぱい映る映像とのシナジー効果（※1）も抜群。間然（※2）するところがない。とは正にこのこと。ただ惜しむらくは、殆どの子どもたちがピンマイクを使っているにしては、セリフが聞こえづらかったです。特に男役が声変わりしていないせいさうでした。

（私は前の方の席で観ました）今後の課題として滑舌が残るのかな？

ブラボー！エンターテイメント、ミュージカル。「メント・モリ（※3）」食べ、飲め、陽気になろう！！
ブラボー・ヤングマン！

※1 相乗効果 ※2 欠点がない ※3 死を忘れるな
京浜協同劇団 大谷敏行

劇団かに座

「嫁も姑も皆幽霊」-青時雨おつる頃

作：池田政之 演出：田辺晴通
6月19日～21日 於：かなっくホール

劇 団かに座創立65周年記念第110回公演。目指しても簡単に達成できる数字ではありません。神奈川、横浜で芝居に関わるものの一人として、本当に心からの敬意、その長い歴史にあらためて芝居に対する想いを強くしました。



そんな記念の公演は『嫁も姑も皆幽霊』。人間味に溢れた舞台上、観劇後の爽やかな切ない余韻がいつまでも心地よかったです。「家族」とは？「大切なもの」とは？「生きる」とは？心の深い部分に語りかけるセリフがたくさん散りばめられていましたが、それが決して押し付けがましくない。素直に心に響きました。

主人公は妻と母を亡くした和菓子屋の跡取りであり、恋愛小説家。再婚相手は18歳年下。登場からしばらくは若い奥さんとの新婚生活をなによりも最優先にするダメ男っぷりで「この主人公に共感できる気がしない…」と不安になるほどでした。

しかし、ストーリーが進むにつれて驚くほど自然に主人

公「けいちゃん」に対する思い入れが強くなっていくのが不思議な感覚でした。それは登場人物たちのキャラクターの心理描写がとてもわかりやすく表現されているからなのかなと感じました。「あの世」の人びとの登場に振り回される「この世」の人びと。怪談もののような分かりやすい登場に客席からも幅広い年齢層からの笑い声。老若男女誰もが共感できるストーリー運びと様々な登場人物たちがそれぞれはつきりとした個性を出しているというのが作品全体の大きな魅力になっているようでした。

幽霊は怖いものの代名詞ではありますが自分の家族が幽霊として出てきたらそこには怖さと同時に「また会えて嬉しい」という感情が芽生える。その絶妙な心理描写が丁寧に表現されているので自然と観ているものの気持ちも登場人物たちに共感し物語に引き込まれていく。あれだけたくさんの登場人物がいるのに誰も嫌いになれないのもとても素敵だなと感じました。町内の人々の絆、家族の絆、それはそのままこの舞台上に流れる演者の方々の絆が重なって見えているからのように思えました。これは出そうと思って簡単に作り上げられる雰囲気ではありません。芝居に対して、舞台に対して誠実に向き合っている劇団さんにしか出せない空気感。ここにも65年積み上げてこられた劇団の大きな魅力というものを感ずることができました。

劇団やぶさか 飯塚春香

演劇プロデュース『螺旋階段』

「river」「謝罪」

脚本・演出：GREEN
6月27日～28日 於：横浜にぎわい座のげチャーレ

JR 桜木町近くの「のげチャーレ」という今回の劇場には初めて訪れたが、客席の高さが十分にあり、最後列の観劇であったが十分に全体を見渡せた。



演劇プロデュース『螺旋階段』第十七回公演は「謝罪」「river」の二本立てで、各一時間程度の中編であった。

「謝罪」に関しては、現在と幼少期の回想が繰り返されていく演出であったが、音楽を効果的に使うことで、実に心地よく、分かり易い展開で物語が進んでいった。

序盤は違和感を感じた小学生時代の回想シーンも、徐々に時系列が進む中で自然と溶け込み、物語の進行と共に切ない伏線を張っていて最後まで集中して物語を追うことができた。エンディングで明かされる過去によって、悪役として印象付けられていた母親がヒロインに代わっていくのが印象的であった。

二本目の「river」はコント調に進んでいくやり取りのテンポが良く、各登場人物のキャラクターが立っていて非常にメリハリのある展開であった。

登場人物のたくさんのセリフの中に散りばめられた伏線

が繋がっていく展開を、今まで明かった各キャラクターがより深みのある印象を与えていた。二本とも、一時間のドラマを見ているような展開で、ワンシーンでの展開にも関わらず観客を十分に引き込んでいた。

笑いがあってこそ、感動的なエンディングをより感動的に感じさせる、ということを実感的に感じさせてくれた公演であった。
YAP 高橋和生

劇団河童座

「ブレーメンの音楽隊」

脚色・演出：横田和弘

8月8日、9日 於：山手ゲート座

これまででこどものためのお芝居を数多くつくってきた河童座の舞台はこどもにもおとなにも親しみやすい舞台になっていた。



開幕前からこどもたちを舞台にあげてゲームを展開し、お芝居の場を盛り上げる手法は河童座の常套的な方法のようで観客は積極的に参加して楽しんでいました。

ただし観客参加型の客あしらいに違和感を感じる観客もいるかも知れない。

舞台は方形の木枠（箱足のバリエーション）の組み合わせを自在に変化することで場面を多様に構成できるシンプルなものでもストーリーがスピーディに展開していった。

グリム童話は残酷だと指摘されているが「ブレーメンの

音楽隊」もその例外ではない。人間のために働き続けてきた動物たちが年をとってしまい飼い主から虐待されるようになっていたり、肉にされて食べられそうになり逃げだしてブレーメンに向かうはなしは動物たちにハッピー・リタイメントではなく経済的合理性を追求する人間の非情を描いた物語と読めなくはない。童話＝こどもではなく、おとなのための童話といえるかもしれない。

年老いて働けなくなったロバが飼い主に邪険にされ逃げだし遠くはなれた町ブレーメンで音楽隊の隊員を募集していると聴き、旅に出る途中、ロバと同じような境遇のイヌ、ネコ、ニワトリに出会い共にブレーメンをめざす。一行は夜になって疲れ果てたところ、前方の森の中に灯をともし家があり、中を覗くとどろぼうたちがごちそうをたべながら金貨を分配している。動物たちは一計を案じ、窓のところでロバのうえにイヌが乗り、イヌのうえにネコ、ネコのうえにニワトリが乗り一斉に大声で鳴いたのでどろぼうたちは化け物が出たと驚き、家からとびだし動物たちは食事にあつた。その後も、計略でどろぼうたちに化け物屋敷と思わせてめでたく動物たちの共同生活の拠点を勝ち取った。タイトルは「ブレーメンの音楽隊」だが動物たちはブレーメンの町にはいない。

ロバ、イヌ、ネコ、ニワトリそれぞれの所有者がルーシーという名前の少女で四人がそろって意地悪で残酷な少女という設定は脚色者の創意として面白い。河童座が背伸びをしないではつらつと活躍するアマチュア劇団の一面がうれしかった。

日本最古の西洋式劇場を記念して建てられた山手ゲート座（岩崎ミュージアム）は客席100席弱のサロン的な雰囲気の小ホールとして「演劇公演」にもっと使われるべきではないかと考えた。
横浜小劇場 荒井賢一

神奈川県演劇連盟 イベントスケジュール

神奈川県演劇連盟合同公演 ドリームミュージカル2016「長くつ下のピッピ-ピッピ虹を渡る-」

2016年2月26日(金)～28日(日)

神奈川県立青少年センター ホール

第13回神奈川県演劇博覧会

2016年3月19日(土)～21日(月・祝)

神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座●劇団川崎演劇塾
- 劇団こゆるぎ座●劇団スタジオソルト●劇団やぶさか●劇団「横綱チュチュ」●劇団よこはま壱座●虹の素●まりこ☆みゅーじあむ
- ミュージカルプロジェクト●YAP 青少年芸術・文化プロモート協会●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP：<http://kenenren.org/>